

〔舞台劇脚本〕

ANTONIN ～ドヴォルザークの生涯～

Antonin ～Life of Dvorak～

狩 谷 新

Kariya Shin

○ 紅葉のライブツイッヒ 1894年秋

上手からクララ・シューマン、下手からヨハネス・ブラームス登場。

クララ「ブラームス、あなたのお気に入りのアントニン・ドヴォルザークがアメリカから戻っていらしたようね」

ブラームス「そうなんだ、クララ、4月に戻って、夏は、ヴィソカーの別荘でゆっくりしたようだ」

クララ「バッハ、ベートーヴェンと並んでドイツ音楽の三大Bっていわれるあなたが、いくらウィーンに誘ってもチェコを離れないみたいね」

ブラームス「奴は生粋のボヘミアン、チェコ人だ。長男にオーストリアの一部までチェコの領地にしてしまった13世紀の国王オタカル二世の名前をつけたくらいだからね」

クララ「プラハの生まれじゃないのよね」

ブラームス「生まれたのはプラハの北30キロほどのネラホゼヴェスっていう小さな村だ。そこで爺さんが開いた肉屋と食堂を兼ねた店の跡取りだった」

クララ「それが音楽家に？」

ブラームス「音楽はチェコ人の命なんだ」

クララ「スメタナの名言ね」

ブラームス「アントニンの父親も二人の叔父もなかなかの演奏家だったし、領主のロブコヴィッツ候も代々音楽好きで、ベートーヴェンのパトロンにもなっていたくらいだから、小さい頃から、音楽に親しんでたし、本人も小学校の先生からヴァイオリンの手ほどきを受けてた」

○ 聖オンドルジェイ教会 1848年 ドヴォルザーク 7歳

ヴァイオリンの手ほどきをシュピッツ先生から受けているアントニン。

シュピッツ「よろしい。では今日から音階の稽古を始めるとしよう。まず初めに、君の名前の調からだ」

アントニン「僕の名前の？」

シュピッツ「そうだ。先週、自分の名前が書けるようにアルファベットを教えただろう？君の名前のイニシャルは？」

アントニン「アントニンですからAです」

シュピッツ「そのとおり。そのAは、ヴァイオリンでは、この二番目にある弦の名前で、その音から始まる音階がAメジャーだ」

シュピッツ、Aメジャーのコード進行を弾く。

シュピッツ「そして、もう一つのイニシャルは？」

アントニン「Dです。ドボルザークのD」

シュピッツ「そうだ。そしてこれがDメジャー」

シュピッツ、Dメジャーのコード進行を弾く。

シュピッツ「どうだ？」

アントニン「どっちもとても明るくて、輝いた響きです。でも…」

シュピッツ「でも？」

アントニン「Dの方が。少し…力強い感じがします！」

シュピッツ「その通りだ。さあ、自分でも弾いてごらん」

アントニンが弾き始める。

○ピアノ演奏 ユーモレスク 変ト長調Op.101 第7番

○ ライブツイッヒ

クララ「なるほど、ずいぶん早くから音楽教育を受けてたってことね」

ブラームス「当時のチェコは、民族としては存在していたけれど、自分たちの国を持ててはいなかったんだ。オーストリア帝国の属国として、政治的な自由はもちろんのこと、経済、宗教、言語の自由まで奪われてた」

クララ「音楽だけが、自由だったのね」

ブラームス「チェコでは赤ん坊がヴァイオリンを抱えて生まれてくるっていわれるほど、多くのチェコ人が自由を求めて音楽家になり、外国に出ていったんだ」

クララ「アントニンもそうだったの？」

ブラームス「いや、彼は、長男として家業の肉屋を継がなければならなかった。音楽は、仕事の疲れを癒す手段として身につけさせられてたんだ」

○ クリスマスイブ 1849年 ドヴォルザーク 8歳

暗い部屋で一人祈りを捧げているアントニン。

アントニン「神様、僕は今夜のために、真夜中のミサのために、ずっと合唱の練習をしてきました。僕だけがシュピッツ先生のおかげで、合唱隊に入れたんです。でも父さんは、従弟や妹たちと一緒に、8時にはベッドに入らせて言ってます。神様、お願いします。父さんに僕の願いを叶えるようにって…」

母のアンナが入ってくる。

アンナ「アントニン、お父さんのお許しが出たわよ」

アントニン「本当に？」

アンナ「どうやら祈りが通じたみたいね」

アントニン「ありがとうございます！」十字を切って上手へ走り去る。暗転。

○ 合唱 クリスマスソング

○ ライブツイッヒ

クララ「どうやら、坊やの夢はお肉屋さんじゃないみたいね」

ブラームス「アントニン・ドヴォルザークの音楽的才能を最初に見出したのは小さな村の小学校にたった一人しかいなかった先生だった」

クララ「さっき、ヴァイオリンの手ほどきをされていたシュピッツ先生ね」

ブラームス「そうだ。アントニンは絶対音感の持ち主だった。たった4か月でヴァイオリンの名手になり、小学校を卒業する頃には、教会で伴奏するまでになっていた」

クララ「それでも音楽の道には…」

ブラームス「父親もその才能は認めてたんだ。でも、卒業した翌日から、父親は肉屋としての修行の教師になった」

クララ「それって、朝起きてから寝るまでが修行ってことになる」

ブラームス「まあそうなんだが、さすがに夕食の後は、くつろいで親子で音楽を楽しんでいた」

クララ「音楽と縁が切れたわけじゃなかったのね」

ブラームス「週に一度はシュピッツ先生の所にも通ってたし、音楽以外にもアントニンの心をとらえたものもあったんだ」

○ 力強く走る蒸気機関車

T ボヘミアの大地に敷かれた鉄道を力強く進む機関車は故郷の小さな村も通過し、幼いアントニンの心をとらえ、生涯の友となった。

アントニン「いつかきっと、僕もあれに乗って、広い世界へ出ていくんだ」

新世界のメロディが重なり

メインタイトル「ANTONINI ～ドヴォルザークの生涯～」

○ ドボルザーク家 ダイニング 1853年 ドヴォルザーク12歳

テーブルを挟んで向かい合っている父とアントニン。

父「アントニン、今日わしは、ヨセフおじさんとも相談したんだが、お前をズロニツエへやろうと思うんだ」

アントニン「ズロニツエ？って、確かズデニェックおじさんのいる？」

父「そうだ。そのおじさんの家から大きな居酒屋って呼ばれてる宿屋へ通って、その主人のノヴォトニーさんから、経営のノウハウを学んで欲しいんだ」

アントニン「何故？」

父「近いうちにわしがその宿屋を買い取るからさ」

アントニン「肉屋の次は宿屋の修行なんだね」

父「それだけじゃない。ドイツ語も勉強するんだ。今の世の中、チョコ語しか話せなきゃ、一生田舎者で終わっちゃう。それにドイツ語の先生はあのアントニン・リーマン先生なんだぞ」

アントニン「えっそれってあの即興オルガニストのリーマンさん？」

父「そうだ。だからドイツ語だけでなく、音楽もしっかり学べる。お前にとって悪い話じゃないだろ？」

アントニン「父さん！最高だよ！ありがとう。本当にありがとう！」

○ ライプツイッヒ

クララ「ドイツ語の必要性が、坊やを救ったわけね」

ブラームス「教会のオルガニストでもあったリーマン先生は、昇天する聖母マリア教会の裏手にヴァルハニーコヴナという家を与えられてたんだ」

クララ「オルガニスト専用の家ね」

ブラームス「家族と住むための居間、寝室、台所はもちろん、広い音楽室があつて、そこには、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ファゴット、ホルン、トランペット、古いけれどグランドピアノまであつた」

クララ「楽譜もあつたんでしょ？」

ブラームス「丁寧に写譜したものから、最新の印刷された高価なものまで揃つてた」

クララ「坊やには天国ね」

ブラームス「一日中いたかつたろうが、アントニンは真面目だった。朝早くから肉職人の仕事をしっかり済ませてから、急いで坂を上がってここへ通つてた」

○ ヴァルハニーコヴナ 1855年 ドボルザーク14歳

譜面台の五線紙に音符を書き込んでいるアントニン。

そっと後ろから近づいていくテリンカ（14歳）

テリンカ「あら、それが一番いいんじゃない？」

アントニン「テリンカ、脅かさないでよ」

テリンカ「あなたがここに来てもう一年になるのね」

アントニン「でも僕のピアノはまだまだだ」

テリンカ「そんなことないわよ。お父様がいつもおっしゃってるのよ。アントニンの音楽的才能は素晴らしいって」

アントニン「リーマン先生が！」

テリンカ「本当よ。初めてここで、ヴィオラを弾いた時から感じてたって」

アントニン「嘘だろ！あの時、僕は、緊張して、まるで地獄に突き落とされたって思ってたんだよ」

テリンカ「お父様は、あなたが来る前に、おじさまから手紙を受け取つてたの」

アントニン「おじさんって合唱隊の指揮者の？」

テリンカ「そう。ネラホゼヴェス村のアントニン・ドヴォルザークっていう男の子が、ズロニツェで勉強を続けたいと言っているのよ、よろしく頼む。稀にみる才能の持ち主だって」

アントニン「僕は、この部屋の中から聞こえるピアノの音に震え上がってたんだ」

テリンカ「なんで？」

アントニン「だって、あんまり上手だから、誰か大人の人が弾いてるんだと思って、ちょっと覗いたら、ちっちゃな子供だったんだ」

テリンカ「あの子は指が良く動くだけ」

アントニン「でも一度もミスタッチしなかつたんだ…僕なんか絶対にリーマン先生の生徒にはなれないって」

テリンカ「震えてるの？」

アントニン「思い出しただけでね」

テリンカ「でもあの時、お父様は、すぐにそのピアノの天才を帰して、ぼうっと立ってるあなたを呼んだでしょ」

アントニン「そうだ。そして、ピアノを弾いてみろって、言ったんだ」

テリンカ「そんな怖い言い方は…」

アントニン「僕には悪魔の声に聞こえた。だってピアノなんか弾いたことなかったんだから」

テリンカ「お父様はあなたがそういうのを聞いて、ちょっと驚いたっておっしゃってたけど、その後、ヴァイオリンとヴィオラを出してきたのよね」

アントニン「どっちも何年も使ってなかったみたいで、弦の調子がめちゃくちゃだったんだ」

テリンカ「お父様はその弦を高い方から順番に合わせていくあなたを見て、あなたの耳の良さに驚いていたのよ」

アントニン「そんなことわからなかったよ。汗だくになって、調弦して、ヘンデルのアダージョを弾いたんだ」

テリンカ「その演奏に感動したお父様がおっしゃったこと覚えてる？」

アントニン「ドイツ語だったんだ。キョトンとしちゃっただけだよ」

テリンカ「君は神からの特別な祝福を得て生まれてきたに違いない！」

○ ライプツイッヒ

クララ「彼女は？」

ブラームス「リーマン先生の娘だ。アントニンと同年で、ピアノの名手だった」

クララ「ピアニストになったの？」

ブラームス「残念ながら魅力的な妻になって、母になったようだ。女性がピアニストになるのは、まだまだ難しい時代だったんだ。クララ、君は特別だったんだ」

クララ「12歳の頃から父に連れられて、あちこちで演奏して回ったわ。楽しかっただけじゃないわね」

ブラームス「君の話を聞いたリストが「女性のピアニストはどの国でもきわめて稀なこと」って言ってたからな」

クララ「私のことはともかく、アントニン坊やは、また先生に恵まれたってことね」

ブラームス「当時チェコの学校の教師はカントールって呼ばれてて、読み書きを教えられるだけじゃなくて、音楽家としての実力も求められてたんだ」

クララ「教会でオルガンを担当するほどってことは、かなり優秀だったってことね」

ブラームス「それにドイツ語教師の資格も持ってた。アントニンを音楽家として育てたいと思った。リーマン先生は、宿屋や肉職人の修業の後、毎日アントニンを熱心に指導してたんだ」

○ヴァルハニーコヴナ

小さな机に座っているアントニン、その前にリーマン。

リーマン「アントニン、まずはピアノだ。いつか君は、オルガンを弾きたくなるだろうからね。それに、伴奏の基本、通奏低音の数字を読んで弾くこと。転調の仕方、フーガや変奏曲の作り方。君に教えたいことは山ほどあるんだ。基礎がしっかりできれば、

作曲家になることだってできる」

アントニン「作曲家ですか？」

リーマン「そうだ。第二のスメタナを目指すんだ」

アントニン「でも、僕は、肉職人になって、宿屋を継がなくちゃいけないんです」

リーマン「そんな弱気でどうする。アントニン、君は音楽が何より好きなんだろ？とにかく今は、お父さんとの約束通り、肉職人の修行と音楽の勉強と、その両方を頑張るんだ」

アントニン「そんなこと…」

リーマン「二倍の努力が必要だ。でもその努力を重ねれば、できないことなんてない。私は君なら、やり遂げられると信じてる」

アントニン「先生…」

リーマン「頑張れるな？」

アントニン「はい」

○ ライプツイッヒ

ブラームス「アントニンが、リーマン先生の所へ来て、一年ほどして、ドヴォルザーク一家八人は総出で、ズロニツェに引っ越してきた」

クララ「例の大きな居酒屋を手に入れたってことね」

ブラームス「そうだ。アントニンは七人兄弟の長男として、父親の片腕となって、働くことになったんだ」

クララ「前より大変なんじゃないの？」

ブラームス「忙しくなれば、パイプオルガンの演奏法まで進んだリーマン先生の所へ通う時間も確保できなかった」

クララ「まだ中学生なのよね」

ブラームス「それは当時あまり問題にならなかったろうな」

クララ「でも、リーマン先生の所へ通わせてたってことは、音楽教育を禁止してたわけじゃないのよね」

ブラームス「そうだ。何しろ本人もいっぱしの演奏家だからな。そこで、ビール好きのリーマン先生は、毎晩、店に通って、とっておきの提案をしたんだ」

○ 大きな居酒屋 1856年 ドヴォルザーク15歳

ジョッキを片手に飲んでいるリーマンの所へアントニンの父親が近づく。

父「リーマン先生、いつも息子がお世話になってます」

リーマン「お父さん、まあ座って、今日は大事な話があるんだ」

父「大事な？」

リーマン「そう。アントニンのことです」

父「何かお手を煩わせるようなことを？」

リーマン「いえいえ、彼はこと音楽に関しては、非常に優秀な生徒です」

父「というと、音楽以外に問題が？」

リーマン「正直に申し上げます。問題はドイツ語です。これはドイツ語の教師でもある私にも責任があります」

父「そんなことは…」

リーマン「いえ、その点は認めざるを得ない。しかしです。アントニンが地元の子供に比べてハンディを負っているのも確かだ」

父「？」

リーマン「こっちの子供たちは、小さいころから少なくともチェコ語とドイツ語を半々に聞きながら育ってるんです」

父「ネラホゼヴェスとはそこが違うと…」

リーマン「あの村ではドイツ語は必要なかった。これは彼の責任ではない。実際、ここへ来た時、アントニンは、ほとんどドイツ語が分からなかった」

父「だいぶましになったとは思いますが…」

リーマン「進歩はしているんです。でも残念ながら十分とは言えません」

父「何か方法は？」

リーマン「あります。彼をチェスカー・カメニツェへ一年間送りだすんです」

父「チェスカー・カメニツェ？」

リーマン「北部のドイツ語圏です。生活すべてがドイツ語になる街です」

父「しかし、留学となると…」

リーマン「お金のことなら心配いりません。ハンドルという制度をご存じありませんか？」

父「さあ…」

リーマン「先方でこちらに息子をよこしたい、という家族を探して、アントニンと交換するんです」

父「交換留学…ですか？」

リーマン「そうです。幸いあの町なら知り合いもいます。相手を見つけるお手伝いは喜んでさせていただきますよ」

父「それは何よりですが…」

リーマン「今のご時世、お父さんのご商売をお継ぎになるにしろ、音楽の道を進ませるにしろ、ドイツ語だけはしっかりマスターしないことにはね」

○ ライプツィヒ

クララ「うまい手を考えたわね。でもお父様はしぶしぶだったんじゃない？」

ブラームス「アントニンは、ちょうど二年間の修行を終えて、肉職人としての技術習得証を取ってたから、安心してたんじゃないかな」

クララ「でも新たな地にも新たな音楽の先生がいらしたのよね」

ブラームス「プラハの宗教音楽センター、俗にオルガン学校と呼ばれてた有名なオルガニスト養成所を卒業したフランティシェック・ハンケ先生だ」

○聖ヤコブ教会 チェスカー・カメニツェ 1857年7月 ドヴォルザーク15歳

アントニン熱心に写譜している。

ハンケ「相変わらず熱心だな」

アントニン「ハンケ先生。対位法をしっかりと勉強してたんです」

ハンケ「どうやら本格的に音楽家を目指す決心がついたようだな」

アントニン「父さんの期待を裏切るのは、つらいんですけど…」

ハンケ「うん。とりあえず、成績が出たんだ」

アントニン「どうでしたか？」

ハンケ「全科目、ゼール・ゲートだ」

アントニン「大変よろしい！」

アントニン、成績表を受け取って、結果を見つめる。

ハンケ「そうだ。そして、もう一つ、いい知らせがある」

アントニン「これ以上に…ですか？」

ハンケ「この秋から、君はプラハに行くことになった」

アントニン「プラハで修行を？」

ハンケ「肉職人は卒業だ。プラハで、オルガン学校に通うんだ」

アントニン「そんなことが…」

ハンケ「リーマン先生や、叔父上、それに領主様も君を音楽の道に進ませるための援助を申し出たそうだ」

アントニン「でも…父さんは？」

ハンケ「心配いらん。弟さんも来年には肉職人の資格を取って、しっかり後を継いでくれるようだし、元々、お父さん自身も君の才能は、十分に認めてたんだから」

アントニン「僕が、プラハへ…」

○ プラハ 1857年 9月 ドヴォルザーク16歳

♪ スメタナ 祝典交響曲 作品6 第三楽章

プラハの紹介映像。

クララ「ここプラハで、アントニンは、初めて、音楽だけに集中することができるようになったわけね」

ブラームス「彼が入学したオルガン学校はやがてプラハ音楽院に合併される権威ある教育機関だ。アントニンは、ここでオルガンの演奏だけでなく、音楽理論、声楽についても体系的に学んで、2年後に卒業する」

クララ「優秀だったんでしょ？」

ブラームス「12人いた学生の中で二番目の成績だった」

クララ「一番じゃなかったの？」

ブラームス「全部の科目で、Aクラスの成績だったんだが、コメントがついてたんだ」

クララ「どんな？」

ブラームス「どちらかといえば、実践的な才能の方がある」

クララ「どういう意味？」

ブラームス「演奏家向きってことだろうな」

クララ「その時一番だったのは？」

ブラームス「もう誰も覚えちゃいない」

クララ「二番目のアントニンが、将来稀に見る作曲家になるとは思えなかったってことね」

ブラームス「本人に意欲はあったようだが、卒業する一年程前から時間的に難しくなった」

クララ「実家に問題でもあったの？」

ブラームス「そうだ。大きな居酒屋は、まさに大きすぎたんだろうな。経営的にかなり厳しい状況になってた」

クララ「呼び戻されたの？」

ブラームス「さすがにそれはなかった。アントニン是一家の希望の星だったからな」

クララ「でも優雅に作曲してる場合じゃないわね」

ブラームス「そうだ。小さな楽団に入って、ヴァイオリンやヴィオラを弾いて小銭を稼いでた」

クララ「その日暮らしの自転車操業ね」

ブラームス「でも悪いことばかりじゃなかったんだ」

クララ「どんなところが？」

ブラームス「いわゆる古典だけじゃなく、当時のポピュラーな作品に触れることができたんだ」

クララ「ちょうど、ベルリオーズ、ワーグナー、リストの曲が流行ってたのね」

ブラームス「そうだ。オルガン学校で同級だった友人が、最高のチャンスを与えてくれてもいた」

○ カレル・ベンドル家 音楽室 1860年 ドヴォルザーク19歳

熱心に写譜しているアントニン。お茶を持ってカレル登場。

カレル「そんなに根を詰めると倒れちゃうぞ」

アントニン「カレル、何を言ってるんだ。ここには、ハイドンもモーツァルトもそしてあの偉大なベートーヴェンもいるんだ。こうして、彼らの書いた音符をたどっていけば、直接教えを受けてる感じがする。ここは僕にとってまさに天国なんだ」

カレル「これだけの楽譜に大枚はたいたうちの親父の金の使い方は、悪くはなかったようだな」

アントニン「もちろんだ！お茶もありがたいが、また面白い連弾の楽譜を見つけたよ」

カレル「それじゃあ一緒に！」

○ ピアノ連弾演奏

○ ライブツイッヒ

クララ「作曲の勉強は独学だったのね」

ブラームス「膨大なスコアをコツコツと丁寧に写していきながら、そこに秘められている法則を探していったんだ」

クララ「それができただけでも大した才能ね」

ブラームス「ベンドル家にあった楽譜は、巨匠のものばかりだったこともよかったんだ。選りすぐられた世界名作文学全集からだけで小説の書き方を勉強したようなものだよ」

クララ「余計な雑音がなかったってことね」

ブラームス「そうだ。アントニンは卒業してから、カレル・コムザーク一世が主催していた楽団でヴィオラを担当してたんだが、そこで、編曲や短い曲を作曲したりもしてた」

クララ「楽団には欠かせない人になったってことね」

ブラームス「でも、給料は安くて、アントニンは、裕福な娘たちにピアノや歌のレッスンをして、わずかな謝礼を稼がなければならなかったんだ」

クララ「作曲どころじゃない感じだったの？」

ブラームス「いや、苦しくても勉強は続けてた。そして、1861年、二十歳になろうとしていたころ、自分が作曲した作品に初めて番号を付けたんだ」

♪ 五重奏曲イ短調 作品1

クララ「作品1にしたってことは、2も作るってことよね」

ブラームス「そうだ。作曲できる時間は限られていたから、小さい子供がたくさんいた従妹の家を出て、父上の一番下の妹だった、お婆さんの家に移った」

クララ「まさに寝る間も惜しんでってことね」

ブラームス「そうだ。次の年の3月には作品二番ができあがった」

♪ 弦楽四重奏曲イ長調 作品2

クララ「両方ともコードはAなのね」

ブラームス「意識したわけじゃないだろうがね。この年の11月18日にチェコ文化の復興の象徴として、常設の国民劇場ができるまで、チェコの戯曲やオペラを上演するための仮設の劇場が出来上がった」

クララ「仮劇場って名前のまま、20年も使われたのよね」

ブラームス「公演回数も5千回を超えてて、最終的に国民劇場の建物に組み込まれたんだが、アントニンの楽団は、この仮劇場のオーケストラになったんだ」

クララ「アントニンがオーケストラピットに入ったってことね」

ブラームス「そのうす暗いピットで、彼は、ロッシニーやベルディのオペラに参加し、23歳で、ワーグナーが自ら指揮したオペラでもヴィオラを弾いたんだ」

クララ「それは衝撃的だったでしょうね」

ブラームス「ベートーヴェンのシンフォニーに心酔していたアントニンにとって、ワーグナー特有の大編成の展開は、圧倒的だったんだらう。翌年にはお婆さんの家を出て、ピアノを持っていたオルガン学校の同窓生と共同生活を始めて、作曲に没頭するようになった」

クララ「それで、幻のシンフォニーを生み出したのね」

ブラームス「1865年の2月から3月にかけて、わずか一カ月半で仕上げた交響曲第一番、ズロニツエの鐘だ」

クララ「完成してたのに、私もあなたも楽譜を見たことも演奏を聴いたこともなかったシンフォニーね」

ブラームス「聞いたことがあったのは、ズロニツエにあった教会の鐘の音くらいだ」

クララ「何しろ、プラハのカレル大学のドボルザーク教授が、1882年にドイツのドレスデンに留学してた時に古本屋でたまたま自分と同じ名前の人の楽譜を見つけて、買ったものが、その人の遺品整理で古本屋に出されて、その半世紀も後に発見されたって聞いたわ」

ブラームス「ブルノで初めて、演奏されたのは1936年だ」

♪ 交響曲第一番 ズロニツエの鐘

ブラームス「第一番の後、すぐに第二番を作るんだが、24歳のアントニンは、自分がかつて、ピアノを教えていた16歳の少女に恋をしたんだ」

○ 仮劇場 舞台

ヨセフィーナ「ああ、ロミオ、ロミオ、どうしてあなたはロミオなの。お父様と縁を切り、その名を捨てて。それが無理ならせめて私を愛すると誓って。そうすれば、私はキューピレットの名を捨てましょう。憎いのはあなたの名前、モンタギューでなくても、あなたはあなた。モンタギューって何？手でもない。足でもない。腕でも顔でも、人のどんな部分でもない。ああ、何か別の名を！名前が何？バラはほかの名前で呼んでも、あの甘い香りは変わらない！」

クララ「女優さんだったのね」

ブラームス「アントニンが教えていた三人姉妹の次女だったんだが、女優業が忙しくなると、レッスンには顔を出さなくなってた」

クララ「それで、アントニンは劇場に通ってたのね」

ブラームス「顔見知りの劇場の人間は、微笑ましく思ってたようだけどね」

○ 仮劇場 ホワイエ

一人で、ヨセフィーナの描かれたポスターを眺めている。そこへ貴婦人が二人やってくる。

貴婦人1「ヨセフィーナのジュリエットは、まさにはまり役ね」

貴婦人2「コメディタッチのものも軽快でいいそうよ」

貴婦人1「また見に来なくちゃね」

貴婦人2「そういえば、カウニッツ伯爵がプロポーズしたそうね」

貴婦人1「でもまだ彼女16くらいじゃない？」

貴婦人2「そうよ。でも女優を続けるという約束で、プロポーズには応じたんですって」
一人、スポットライトに照らされるアントニン。

暗転。

○ 鎖橋 夜

河畔に立つアントニン。

♪ 糸杉

君は 私の歌がなぜ絶望的な音で 怒りを誘うと聞く
なぜそれほど悲しく まるで岩をも砕く濁流のように暴れるのか
愛しい人よ どうか聞かずにいておくれ
私には言葉にできない 心を引き裂いた苦しみのことは…
愛も栄光も壊れることなく 天の美しさも時に流されることはない
カビに覆われ薄れゆく幸せも 奇妙な幻影も 世界の荒れ地も
嵐のように絶え間なく襲ってくる怒りも興奮も 私の歌の心 には響かない
痛みだけが たった一つの痛みだけが 私の心を乱し 魂をゆすぶり 幸せから遠ざける
失恋の痛みだけが 絶え間なく心を引き裂き 悲しみの歌を紡いでくれる
この大いなる痛みこそわが故郷

ブラームス「アントニンは全部で18曲にもなるこの歌曲を7月12日から、27日までの間に

書き上げ、カレル・ベントンにささげたんだ」
クララ「相手に思いを伝えることもできなかったのね」
ブラームス「はかない初恋だったが、作曲家として成長するためには必要な試練だったのかもしれない」
クララ「切なさが素直に伝わってくる作品ね」
ブラームス「この歌のメロディをアントニンはいぶ後になってから弦楽四重奏に書き直してる」
クララ「思いの強い曲だったってことね」
ブラームス「傷心のアントニンを刺激するようなことが次の年に起こった」
クララ「新しい恋人？」
ブラームス「そうじゃない。スメタナが仮劇場の主任指揮者になったんだ」
クララ「目指すべきモデルが目の前に現れたってことね」
ブラームス「そうだ。そのスメタナのオペラ「売られた花嫁」の舞台上、アントニンはヴィオラを演奏した。音楽は感情の言葉、言語は思想の言葉。その二つを結び付けてチェコ人はチェコ人の音楽を創る」
クララ「スメタナの名言ね」
ブラームス「アントニンはオペラの熱に浮かされたように、1870年にアルフレッド大王というオペラを書きあげてしまう」
クララ「ワーグナーの悪い影響が出たって言われてる作品ね」
ブラームス「その影響を払拭するためには必要なプロセスだったんだろうな。本人も納得していたようで、すぐに次の「王様と炭焼き」というチェコ語のオペラを書き始める」
クララ「へこたれないのね」
ブラームス「オペラも独学でマスターしようとしてたんだ。数をこなしていくしかないだろう」
クララ「少しは進歩したの？」
ブラームス「作曲の時間を確保するために楽団をやめて、かなり頑張ったんだが、出来上がった楽譜をみたオーケストラの連中から、難しすぎて演奏できないと突き返された」
クララ「まだまだ頭でっかちだったってこと？」
ブラームス「そうだな。でもアントニンはどんな作曲家もやったことのないことをやってのける」
クララ「どうしたの？」
ブラームス「歌詞はそのままにして、曲を全部書き換えたのさ」
♪ 王様と炭焼き 序曲
クララ「だいぶ落ち着いてきたみたいね」
ブラームス「このオペラが実際に上演されたのはかなり後なんだが、この序曲は、1872年、アントニンが31歳の時にスメタナが指揮して演奏された」
クララ「評価され始めたってことね」

ブラームス「そして、その翌年、ハーレックという詩人が書いた「白い山の後継者たち」という叙事詩の終わりの部分に曲を付けた」

○ カレル・ベンドル邸 音楽室 1872年 冬 ドボルザーク31歳

楽譜を読んでいるカレル。その横に立つアントニン。

カレル「頑張ったな」

アントニン「カレル、君に褒められると何よりも自信になる」

カレル「前半は、白い山でハプスブルグの大群に敗れたチェコの悲哀にあふれてるし、後半はそれでも失われることのないチェコ人の自由と独立への思いが高らかに歌い上げられてる」

アントニン「伝わるかな」

カレル「もちろんだ。これをうちの合唱団で発表しよう」

アントニン「フラホール合唱団で？」

カレル「そうだ」

アントニン「確かに君はあそこの指揮者だけど、フラホールは男性合唱団だろ？」

カレル「うちには男しかいないけど、プラハに女性のコーラスがないわけじゃない」

アントニン「集められるのか？」

カレル「この楽譜を見て歌いたがらないチェコの女性歌手がいたら連れてきてみる。大丈夫だ。俺に任せろ。このカンタータにヒムヌス、讃える歌ってタイトルを付けた君のセンスはきっと評価されるさ」

○ ノヴォミェスト劇場 1873年3月9日 ドヴォルザーク 31歳

♪ 讃歌 白い山の後継者たち

T 「この曲のリハーサルを聞いた音楽評論家のルデヴィート・プロハーストは音楽新聞に紹介文を載せた。アントニン・ドヴォルザークによるこの作品は、すぐれたアイディアによる、深い暗示に満ちた感動的な作品である。曲全体は、まるで一つの鋳型から創られたように。すべてが真実で表現豊かな問いかけとなり、とどまることを知らない潮流にのって突き進む。豊饒な多声形式の中で、生き生きとした色彩のオーケストラによって支えられている。まさに讃歌、壮大で勇敢、英雄的で新時代の尊厳を備えた巨匠的な絵画を見るようだ。母は独りしかいないように、祖国も一つしかない」嵐のような拍手の中で、客席に深々と神戸を垂れるアントニン。

そこへスメタナが上手から近づく。

アントニン「スメタナ先生」

スメタナ「君から先生と呼ばれるのは光栄だが、君はもう立派な作曲家で、むしろ僕のライバルだ」

アントニン「マエストロ、僕なんかまだまだです」

スメタナ「これだけの観客を魅了したんだ。自信をもってくれ。今度、君の作品だけでコンサートを開こうと思う。協力してくれるね」

アントニン「もちろんです」

○ ライプツイッヒ

クララ「大成功ね」

ブラームス「民族の象徴であるチェコ語で書かれた歌詞も助けにはなっていたと思うが、元の詩に感銘を受けたアントニンの思いが観客にストレートに伝わったんだ」

クララ「一夜にしてチェコを代表する作曲家になったってことね」

ブラームス「スメタナがオファーしたコンサートも5月に行われ、大成功だった」

クララ「お父様も聞きにいらしたのよね」

ブラームス「この頃一家は、ズロニツエを引き払って、クラノドという町でひっそりと暮らしてた。音楽家として立派に成功しつつあったアントニンだけが心の支えだったんだ」

クララ「あの祖国の英雄スメタナが、息子の曲を演奏するのを見れたってことね」

ブラームス「そうだ。そして、成功の第一歩を飾ったカンタータは、アントニンに決定的な出会いも提供したんだ」

○ カレル・ベンドル邸 音楽室 1873年 6月 ドボルザーク31歳

ワイングラスを片手に乾杯しているカレルとアントニン。

カレル「どうやらこの乾杯は、5月のコンサートの成功だけのものじゃないみたいだな」

アントニン「隠すこともないな。実は、アンナと結婚しようと思うんだ」

カレル「出会いは、カンタータだな？」

アントニン「彼女は僕の教え子だったんだ」

カレル「ヨセフィーナの妹だよな。でも君が教えていた頃は、まだ…」

アントニン「10歳だった。それが今は18だ」

カレル「立派な歌手になった」

♪ アンナ 独唱

歌い終わりで、花嫁姿のアンナと入れ替わり、アントニンが現れ、結婚式へ。

1873年11月17日 ドボルザーク32歳 祝福を受ける二人。

○ ライプツイッヒ

クララ「生涯の伴侶を得たわけね」

ブラームス「結婚の翌年の2月にアントニンは建設中だった国民劇場の裏手にある聖アダルト教会（Church of Saint Adalbert）のオルガニストになった」

クララ「定職についたってことね」

ブラームス「給料は驚くほど安かったけれど、新妻のアンナは聖ミクラーシュ教会で歌手として家計を助けてたから、まあ生活は安定して、翌年には長男も生まれた」

クララ「チェコの英雄の名前を取った息子ね」

ブラームス「仕事も順調で、3月の終わりに交響曲第3番を仕上げ、それから1か月もしないうちに四番を完成、どちらもスメタナの指揮で演奏された」

クララ「まさに順風満帆ね」

ブラームス「全曲書き直したオペラ、「王様と炭焼き」も上演されて成功を収めた」

クララ「子供ができたことが幸いしたのね」、

ブラームス「そうだ。すっかり子煩悩になったアントニンは、カレルの家にもめったに顔を出さなかった」

○ ドヴォルザークのアパート 1874年7月 ドヴォルザーク 32歳

赤ん坊をあやしているアンナの横で、机に向かって作曲しているアントニン。

下手からカレル登場。

カレル「相変わらず仕事熱心だな」

アントニン「よく来てくれたな。自慢の息子を見てくれるかい？」

カレル「チェコの英雄オタカル様にご拝謁できるのか？」

アントニン「抱き上げる栄光も付与しよう」

カレル「ありがたき幸せ」

赤ん坊をアンナから受け取り、抱き上げ、頬にキスするとアンナに返す。

カレル「光栄の至りだが、今日は一つ提案があつてきたんだ」

アントニン「君が都合をつけてくれる五線譜にはいつも感謝してる」

カレル「そんなことはなんでもないさ。アントニン、ウィーン文化教育省つてのを知ってるかい？」

アントニン「奨学金の話か。二、三年前に一度申し込んだことがあるよ」

カレル「結果は？」

アントニン「なしのつぶてさ、楽譜も返ってこなかった」

カレル「それは、二年も前だったからさ。今の君ならきっと受け付けてもらえるよ」

アントニン「そうは思えないけど」

カレル「いいかい、この奨学金は、若くて才能はあるけど、貧しい芸術家のためのものなんだぞ」

アントニン「貧しいってところは当たってるけど…」

カレル「そっちは問題じゃない。今時、二か月足らずで交響曲を2曲も仕上げる作曲家がいるか？しかも二曲とも、あのスメタナが初演を引き受けてくれる出来なんだぞ。君ほど若くて才能にあふれた芸術家はいないよ」

アントニン「そうかな」

カレル「いいから、一番新しい交響曲の譜面を写して、応募するんだ。そのための五線譜なら。いくらでも届けさせる」

アントニン「君がそう言うなら、出してみるけど」

カレル「絶対だぞ。何しろ受かれば今の給料の4倍のお金が一年間もらえるんだからな」

○ ライプツイッヒ

クララ「この時送られてきた楽譜を審査したのが、あなただったのよね」

ブラームス「そうだ。審査したのは私だけじゃなくて、皮肉屋のハンスリックや、宮廷歌劇場のヘルベックもいたが、誰もがアントニンの才能に圧倒されたんだ」

クララ「その割には、決定までに時間がかかったみたいね」

ブラームス「審査対象は音楽だけじゃなかったからな。画家や彫刻家からの応募もあったんだ。時間がかかったのは仕方ないさ」

クララ「それにしても、7月に申し込んで、結果が出たのは翌年の2月でしょ」

ブラームス「確かに最初は遅かったが、アントニンはその後もこの奨学金を5回続けて獲得してるから、作曲活動には十分貢献したはずだ」

クララ「そうね。彼は休むことなく名曲を生み出してた。2回目の奨学金が決まった年の

九月には女の子を授かった」
ブラームス「ヨセフィーナだ」
クララ「長女に初恋の相手の名目を付けたのね。アンナはちょっと複雑だったでしょうね」
ブラームス「でもそのヨセフィーナはたった三日間で天に召されてしまったんだ」
クララ「そしてこの曲がうまれた」
♪ピアノ三重奏曲第二番 ト短調 作品26
アントニン「僕は、もう少し妻を気遣うべきだった。アンナは身重で歩き始めたばかりのオタカールの後を追ひ、家事のすべてを引き受け、作曲中の僕の邪魔をしないように気を配って、自分の体のことを一番後回しにしていたんだ。だから、ヨセフィーナも…」
クララ「この時書いていたオペラ「ヴァンダ」も上演はされたものの、成功とは程遠い出来だったのよね」
ブラームス「ヴァンダはポーランドの王女の話だった。この頃、チェコの人たちに不利になる法案が提出されて、それにポーランド選出の議員が賛成票を投じていたんだ」
クララ「誰もそのポーランドの王女の話には共感しなかったってことね」
ブラームス「彼の才能はまだオペラの質を上げるまでになっていなかったのも確かだが、この失敗は、彼をまた前進させた」
クララ「そして、1876年9月18日、ルージェンカが生まれたのね」
ブラームス「翌年には、教会のオルガニストもやめ、作曲に専念して、長女の誕生の喜びが、そのまま「いたずら百姓」に生かされる」
クララ「その完成が7月、そして8月のある日」
○ レटना公園 1878年8月 ドヴォルザーク36歳
モルダウ川を見下ろす丘陵で、ベンチに座っているアントニンとアンナ。
アンナ「なぜ散歩に誘ってくださったの？」
アントニン「子供たちはお昼寝中だったし、窓の外には太陽があふれてた。そしたら君と散歩した頃のことを思い出してね」
アンナ「あれからもう4年になるのね」
アントニン「苦労ばかり掛けた」
アンナ「そんなことないわ。暮らしも楽になったし、安心して子供たちを預けられる子守りまで雇えるようになったじゃない」
アントニン「それもこれも君の支えがあったからだ」
アンナ「感謝するのは私の方。アントニン、私は世界一幸せな女だわ」
二人、抱擁。
教会の鐘の音。
アンナ「あらもう六時だわ。子供たちが目を覚ます」
二人立ち上がる。
マルシュカ「旦那様！奥様！ルージェンカが…ルージェンカが…ああ！」
落雷、暗転。

クララ「子守りがちょっと目を離れた隙に硫黄を口に入れたらしいわ」

ブラームス「信心深い二人もこの時は、神を呪ったかもしれないな」

クララ「そして、アントニンの誕生日の少し前から、今度はオタカールが高熱に苦しみ始めた」

ブラームス「天然痘だ。オタカールは9月8日、父親の誕生日に身罷った」

息子の小さなベッドの横で、シルエットでうなだれるアントニンとアンナ。

♪ 悲しみの聖母

アーメン 肉体が減じる時には どうか魂に 栄光の天国をお与えください アーメン
T この年の秋、アントニンとアンナは子供たちの思い出の残るアパートから、ジトナー街へ移った。

クララ「二人が悲しみの底にいた頃、あなたは何も知らずに、二回目の応募作品をジムロックに紹介したのね」

ブラームス「ハンスリックが持ってきた楽譜は衝撃的だった。全部で13曲、どれもきらきらと輝いていた」

♪ モラヴィア民謡による二重唱曲 第13番 野ばら 作品32 B. 62

娘は草刈り場に 緑の牧草地に でも、朝露が冷たくて 草は刈れず
牧草地を歩くと 涙がこぼれた その時 野ばらが 優しく微笑んだ
きれいな野ばら あなたが欲しい

やめて 冬には摘まないで 寒さで美しさが萎んでるから

やめて 夏には摘まないで お日様に焼かれているから

やめて 冬には摘まないで 寒さで美しさが萎んでるから

春まで待って 私はきっと美しい

クララ「あなたが見込んだ通り、ジムロックはアントニンの才能を一目で見抜いたのよね」

ブラームス「チェコ語だった歌詞をすぐに訳して出版した」

クララ「そして、大いに儲かったのね」

ブラームス「ジムロックは商売人だ。早速、アントニンに私のハンガリー舞曲のようなピアノ連弾用のチェコ舞曲集を注文したんだ」

クララ「アントニンは楽譜出版王ジムロックの期待にすぐに答えたのよね」

ブラームス「1878年だ。6月には新たな娘を授かったアントニンは、たった二か月でスロヴァキアの踊りやウクライナ民謡まで取り込んでスラブ舞曲集を書き上げたんだ」

♪ ピアノ連弾 スラブ舞曲集第一集 1 ハ長調

クララ「この曲もヨーロッパ中で、売れたのよね」

ブラームス「ケチなジムロックは、モラヴィアの時は一銭も払わなかったくせにこの舞曲集の売れ行きで、アントニンの才能に確信を持ったと見えて300マルクもの印税を払った」

クララ「気をよくしたアントニンはすぐにオーケストラ用に書き換えたのよね」

♪ スラブ舞曲集第一集 1 ハ長調

ダンス・パフォーマンス

ブラームス「暮れには、この舞曲集は、ドイツはもちろんイギリス、アメリカでも演奏されるようになったんだ」

クララ「そして、同じ頃、アントニンはあなたを訪ねてウィーンにやってきた」

ブラームス「1878年の一月だ。残念なことに、わしはドイツに出かけていて会えなかったんだ」

クララ「でも弦楽四重奏協第9番を送られたのよね」

♪ 弦楽四重奏曲9番 二短調 作品34

ブラームス「完成度は高かったんだが、仕上げを急いだ部分があったんで、不在をわびた手紙に意見を添えて出した」

クララ「そこから、二人の本当の交流が始まったのね」

ブラームス「8歳年下のアントニンは、常に仕事に忠実だった」

クララ「ヨーゼフ・ヨアヒムも彼のファンだったのよね」

ブラームス「ヨアヒムの協力で、あのバイオリン協奏曲イ短調が生まれたんだ」

♪ ヴァイオリン協奏曲イ短調 作品53

T「ジムロックが出版した楽譜からの収入は、アントニンの生活を飛躍的に潤した。気丈なアンナは六人の子供たちを次々と生み、その明るい喧騒の中で交響曲第六番をはじめ充実した作品を仕上げていった。そしてチェコの人々が夢見た国民劇場が完成する」

○ 国民劇場 1881年6月11日

♪ リブシェ 序曲 ベトルジハ・スメタナ作曲

T「チェコ建国の神話をオペラ化したスメタナのこの作品は、祝祭オペラといわれ、大好評を博した」

○ マリエ・チェルビンコバー・リーグロバー家 1881年8月12日 ドヴォルザーク39歳
暖炉の前で寛いでいるマリエ。メイドが来客を告げる。

メイド「マリエお嬢様、ドヴォルザークさんがお見えです」

マリエ「アントニンさんが？いいわ、お通しして」

アントニン登場。

アントニン「夜分失礼いたします。誰よりも一番にお知らせしたかったので」

マリエ「ディミトリーのこと？」

アントニン「そうです。つい先ほど仕上がりました」

マリエ「私のお話が、オペラになるんですのね。しかもあなたの作曲で…。光栄ですわ」

アントニン「感謝しているのは私の方です。あなたは最高の台本を提供してくださった」

マリエ「ボリス・ゴドノフを追い詰めたディミトリーのその後が気になって、調べているうちに、宿敵ボリスの娘との恋が面白いと思って書いた、ほんの手慰みでしたのに」

アントニン「いえいえ、正直申し上げて今までの私のオペラは、いつも台本の欠点を指摘されていたのです」

マリエ「喝采を受けたものも？」

アントニン「それは、自分で言うのもなんですが…」

マリエ「マエストロのお力ってことですね」

アントニン「本当は、納得いくまで台本を推敲すべきだったんです。妥協せずに」

マリエ「今回は納得が？」

アントニン「それ以上です。セリフの一つ一つが輝いていました」

マリエ「そのセリフにマエストロの素敵なメロディがつけられたのですね」

アントニン「国民劇場で上演されます」

メイドが走りこんでくる。

メイド「お嬢様！」

マリエ「どうしたの？お客様の前で、そんなに慌てて」

メイド「国民劇場が…今、火事で…」

○ 燃え上がる炎

T「この日、完成して二か月足らずの国民劇場は焼失した」

○ライプツイヒ

クララ「ディミトリーはどうなったの？」

ブラームス「翌年、1882年の12月にチェコ劇場で上演され、大成功を収めた。あの皮肉屋のハンスリックまで新聞で褒めた」

クララ「国民劇場はそのまま？」

ブラームス「チェコの人々の結束は火災で一層強まったようだ。全国から寄付が集まって、二年で作り直されて、こけら落としにはスメタナのリヴジェが再演されたんだ」

クララ「アントニンは？」

ブラームス「うれしいこともあれば悲しいこともある。アンナのお中には7人目の子供がいたんだが、その子を見る前の12月15日、アントニンの母上が亡くなった」

クララ「赤ちゃんは？」

ブラームス「翌年の3月7日に生まれた」

クララ「男の子だったのよね」

ブラームス「アントニン二世だ。そして8月、ロンドン・フィルハーモニー協会から、演奏依頼の手紙が来る」

クララ「作品は前から海を渡ってたのよね」

ブラームス「スラブ舞曲の楽譜は飛ぶように売っていたし、ハンス・リヒターの指揮で、三つのスラブ狂詩曲が演奏されて評判を呼んでた」

クララ「20年近く前のシュトラウスと同じような展開ね」

ブラームス「そうだな。イギリスは17世紀のピューリタン革命で、賭博や売春と一緒に演劇や音楽を人間を堕落させるっていう理由で、禁止してたから、他のヨーロッパに比べると作曲家があまり生まれなかったんだ」

クララ「それでハイドンも呼ばれたわけね」

ブラームス「そうだ。自分の国にいなかったから、公平な評価をしてたともいえる」

クララ「そのイギリスから懇願されたんだから…」

ブラームス「アントニンも大好きな汽車に乗って、イギリスを目指した」

♪ スターバト・マーテル（悲しみの聖母）作品58

前奏の中アントニンが手紙を読み、スクリーンにはイギリスまでの工程が映し出される。

アントニン「私のために集められたのはソプラノが250人、アルトが160人、テノールが180人、バスが250人、第一ヴァイオリン24、第二ヴァイオリン20、ヴィオラ16、チェロ16、コントラバスが16…。この素晴らしい集団が、1万2千の観客の前で、私の指揮に答えてくれたのです」

疾走する蒸気機関車

ドーバー海峡を渡る船

○ ロイヤルアルバートホール 1884年3月 ドボルザーク 42歳

聖母は悲しみにくれ 涙にむせびて 御子のかかりし 十字架のもとに佇む

嘆き 憂い 悲しめるその魂を 剣が貫いた

おお 神の一人子の 祝されし聖母の 悲しみと傷はいかばかりか

御子が罰を受けるのを 見ていた慈愛深き聖母の 悲しみと苦しみはいかばかりか

御子が罰を受けるのを見て どれほど悲しみ 苦しみ おののいたことか

中略

肉体が死するときこそ 魂に天国の栄光を！

大拍手と歓声にこたえるアントニン

アントニン「これ以上のことは望めないほどの成功だったようです」

○ ライプツィヒ

クララ「大満足だったようね」

ブラームス「イギリスの反応に感銘を受けたアントニンは、その後何度もドーヴァー海峡を渡り、1890年には、ケンブリッジ大学から名誉音楽博士号を受けるまでになった」

クララ「そして、イギリスへの演奏旅行は経済的にも大きな結果を生んだのよね」

ブラームス「そうだ。プラハから南に60キロ離れたヴィソカーというところに夏用の別荘を手に入れたんだ」

クララ「ヴィソカーって確か、ヨセフィーナが嫁いだカウニツ伯爵の領地よね」

ブラームス「そうだ。アントニンは初恋の人とも再会できた」

○ カウニツ伯爵邸の庭 ヴィソカー 1884年8月 ドボルザーク42歳

ヨセフィーナと庭の椅子に並んで座るアントニン。

アントニン「ヨセフィーナ、君とこんなおだやかな時間を過ごせるようになるなんて、僕は想像もできなかった」

ヨセフィーナ「幸せなのね」

アントニン「もちろんだ。心地よい風も、時おり聞こえる小鳥のさえずりも、みんな僕を祝ってくれているようだ」

ヨセフィーナ「今あなたが、心から感じている幸せ、それはすべて、今まであなたがしてきたことの成果なんじゃないかしら」

アントニン「積み重ねた努力が実ったってことかな？」

ヨセフィーナ「そうね。でも、ここがゴールではないわ」

アントニン「このまま、ずっと休んでいていいわけじゃない」

ヨセフィーナ「あなたにはまだ成し遂げたいことがあるんでしょ？」

アントニン「そうか、この時間はそのための英気を養うためのものなんだな」

ヨセフィーナ「そうよ。あなたは、あなたの生み出す音楽を待ち望んでいる人のために、もう少し、頑張るべきなんだわ」

ブラームス「アントニンは一年のうちの半分以上をこのヴィソカーで過ごすようになった」

クララ「まさに第二の故郷になったってことね」

ブラームス「そして、1888年、アントニンは、プラハであのチャイコフスキーと知り合う」

クララ「その年に彼のオペラを見たのよね」

○ エフゲニー・オネーギン チャイコフスキー作曲

T「チャイコフスキーの全10作のオペラの中で最も頻繁に上演される代表作。プーシキン原作のこのオペラをツルゲーネフは、トルストイにあてた書簡で「疑いの余地がなく素晴らしい」と書き送った」

♪ねえ聞いた 林の向こうからの夜の声を 恋の歌人の、悲しみの歌人の？

朝 すべてが沈黙しているとき 物憂くも素朴な葦笛の調べを聞いたのかしら

中略

あなたに他の道はないのです！オネーギン様 私の決心は変わりません

いやあなたにはできない 私は拒否する

私の運命は別の人を 私に与えました 彼と生きていくのです 別れるなどあり得ません

あなたは俺のために捨てなければならない すべてを すべてを

いいえ 私じゃ誓いを忘れてはならないのです！

ブラームス「プラハでチャイコフスキーと知り合った後、このオペラを見たアントニンは、1890年、あの偉大な作曲家の招きでロシアを訪れた」

○ チャイコフスキー宅 モスクワ 1890年 ドヴォルザーク 49歳

中央で握手を交わすチャイコフスキーとアントニン。

アントニン「ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー、お招きにあずかり、光栄です」

チャイコフスキー「アントニン・レオポルド・ドヴォルザーク！あなたこそ遠いところをよく来てくださった」

アントニン「プラハでオペラを拝見しました」

チャイコフスキー「あれを見ていたんだね」

アントニン「公演の後はお忙しかったようで、今夜やっと、感想をお伝え出来ます。素晴らしいかった。圧倒されました」

チャイコフスキー「君にそう言ってもらえると、本当にうれしい」

アントニン「まさに巨匠の貫録を備えていて、とても同世代の作品とは思えませんでした」

チャイコフスキー「でも初演での評判は必ずしも良くなかったんだよ」

アントニン「手を加えられたのでしょうか？」

チャイコフスキー「君が見たプラハの公演は第三幕を直して私が自分で指揮できたからね」

アントニン「ドイツではマーラーが指揮なさったと聞いています」

チャイコフスキー「マーラーも君のことは褒めていたよ」

アントニン「若いのに大した男です」

チャイコフスキー「プラハ音楽院の仕事はどうするつもりかな」

アントニン「作曲の時間を取られるのは本意ではないんで、考えているところです」

チャイコフスキー「僕は受けるべきだと思うな。君はただの作曲家じゃないんだから」

アントニン「ただの作曲家ですよ。まだまだ勉強不足の」

チャイコフスキー「それは違うな。君はチェコを代表する作曲家だ。不幸にして国を持たない民族の伝統を音楽を通じて、次の世代に伝える役割を担ってる」

アントニン「マエストロ…」

○ ライプツイヒ

クララ「翌年、アントニンは作曲科の教授になったのね」

ブラームス「そうだ。上級生コースで最初の12人の学生に作曲法や管弦楽法を教えた」

クララ「その中にヨゼフ・スークとオスカル・ネドバルがいたのよね」

ブラームス「後からビチェスラフ・ノバークも入ってきた」

クララ「三人ともチェコの音楽史に名を遺す音楽家になったのよね」

ブラームス「結構厳しい先生だったようだが、学生の評判は良かったようだ」

クララ「そして、その教授としての才能に目を付けた人がいたのよね」

ブラームス「それもとんでもないところにね」

○ ニューヨーク サーバー邸 1891年秋 ドボルザーク 49歳

机に向かっているジャネット・サーバー夫人とソファで寛ぐサーバー氏の所へ秘書が手紙を持ってくる。

秘書「奥様、ドヴォルザーク氏から、申し出をご辞退するという事で…」

ジャネット「年俸1万5千ドルじゃ不満なのかしら」

秘書「理由は書かれてございませんが…」

ジャネット「金額じゃないわね。私は、あきらめないわよ」

サーバー氏「ジャネット、前から聞こうと思ってたんだが、どうしてドヴォルザークなんだ？」

ジャネット「ロシアのチャイコフスキー、ノルウェイのグリーク、そして、チェコのドヴォルザークって言われてるのは知ってるわよね」

サーバー氏「それぞれお国の文化を音楽で世界に知らしめた三人ってことだよ」

ジャネット「そう。それに比べてこのアメリカの音楽はどう？ドイツ人ばかりがのさばっていて、まるでドイツ以外に優れた音楽はないって言われてるみたいじゃない」

サーバー氏「ドヴォルザークがアメリカ音楽を創ってくれるのかい？」

ジャネット「違うわ。作曲を依頼するわけじゃない。三人の中で、教育者といえるのは彼だけなのよ」

サーバー「そういえば、プラハで教授になって、ケンブリッジからも名誉音楽博士に選ばれるみたいだな」

ジャネット「国を代表するような音楽を創るための哲学を教えてもらいたい」

サーバー「新しく出たスラブ舞曲集が紡ぎだした、その民族特有のエッセンスの引き出し方ってことか」

ジャネット「そうよ。ドヴォルザークがこちらに来てくれれば、この国が独自に持ってい

るメロディの特徴をきっと見つけ出してくれる。それを私の音楽学校の学生に伝えて欲しいのよ」

サーバー「でも辞退してきたんだよね」

ジャネット「将を射んとすればまず馬を射よ！プラハ音楽院を攻め落とすわ」

○ライブツイヒ

クララ「彼女の作戦は功をなしたのね」

ブラームス「外堀を埋められて降参した感じだな。アントニンは妻と二人の子供を連れて、大西洋を渡った」

クララ「それにしても19世紀に年俸1万5千ドルっていうのはすごいわね」

ブラームス「21世紀に物価は28倍になっているって言われてるから」

クララ「年収42万ドルってことね、5千万円で二年契約だから、1億円ってことね」

ブラームス「年に4か月の休暇があって、週六時間の作曲の授業と4時間の学生オーケストラの指揮、アメリカ各地での10回の自作のコンサートを指揮するだけで、受け取ることができたんだ」

クララ「あなたならどうした？」

ブラームス「わしには家族もないし、受けない…だろうな」

クララ「私が一緒なら？」

ブラームス「その質問は一種のセクハラだよ」

クララ「ごめんなさい。アントニンはだいじょうぶだったの？」

ブラームス「バッハ、ベートーヴェンから、ワーグナーに続く、ドイツ音楽全盛だったアメリカに、アントニンが作り出した別のメロディが流れ出し、とても高く評価され始めてたから、彼はどこへ行っても大歓迎を受けた」

クララ「人工的なニューヨークでの生活はどうだったの？」

ブラームス「ロンドンで大都会は経験済みだったし、早寝早起きという生活習慣は変わらなかった」

クララ「社交界とのおつきあいは？」

ブラームス「夜の外出は極力避けて、朝の散歩を欠かさず、港で船を眺め、駅で列車を、セントラルパークで自然に親しんで過ごしたようだ」

クララ「鳩が好きだったのよね」

ブラームス「セントラルパークには大きな鳩小屋があって、そこで、ヴィソカーに残してきた鳩たちのことを思ってたみたいだ」

クララ「黒人霊歌やインディアンメロディにも触れてみたいね」

ブラームス「アメリカ独自の旋律を見出そうとしてたんだ。港で、ヨーロッパに旅立つ船を見送っては、ホームシックになっていたアントニンだったが、夏休み前に、依頼のあった交響曲第9番を完成させてる」

クララ「いみじくもベートーヴェンのものと同じ番号になった名曲ね」

ブラームス「思い残すことなく故郷で夏休みを送るはずだったんだが、教えていた学生の一人が、アメリカ生まれのチェコ二世で、彼が、マエストロを故郷に招待したんだ」

クララ「どこなの？」

ブラームス「ニューヨークから2千キロも離れたアイオワ州の小さな村だ」

○ スピルヴィル 1893年6月 ドボルザーク51歳

♪弦楽四重奏曲第12番 アメリカ 作品96

心地よい風景の中を歩いているアントニンとヨセフ・ヤン・コヴァルジーク。

アントニン「ヨセフ、アメリカにこんな場所があるとは思わなかったよ」

ヨセフ「小さな村ですがここにいる人はみんなチェコの出身者です」

アントニン「言葉が通じることもそうだが、この風景がチェコそのものだ。懐かしいヴィソカーの自然と少しも違わない」

ヨセフ「そうおっしゃっていただければ、ご招待した父も本望でしょう」

アントニン「家族全員引き連れてきてしまっただけで迷惑ではなかったのかな」

ヨセフ「残されていたお子さんを全員呼んでいただけて安心したんです。離れ離れだとうしても落ち着かれないでしょうから」

アントニン「正直小さい子たちには、不安だったんですが、すぐに溶け込んで、はしゃぎまわってる」

ヨセフ「地元の子供ともすっかり仲良くなって」

アントニン「仕事の筆もスムーズに進んでる。本当にありがとう」

○ ライプツイッヒ

クララ「おもわぬところで祖国を味わったってことね」

ブラームス「この後、シカゴで開かれていた万国博へ行って、チェコの日として位置づけられた8月12日にコンサートも開いた」

♪ ピアノ三重奏曲 第4番 ホ短調『ドゥムキー』

ブラームス「この後、アントニンは誘われるままにネブラスカとミネソタのチェコ村を訪ね、ナイアガラ滝も見物してニューヨークに戻った」

クララ「新学期が始まったのね」

ブラームス「相変わずの日常を送っていたんですが、そこにとんでもないニュースが飛び込んだんだ」

クララ「チャイコフスキーが亡くなったのね」

ブラームス「11月6日だ。まだ53歳だった。アントニンとは一つしか違わなかった」

クララ「ショックだったでしょうね」

ブラームス「ちょうどそのころ、ピアノのためのソナチネを子供たちのために作曲していたんだが、第二楽章はチャイコフスキーの死を悼むようなメロディになった」

♪ソナチネ 作品100 第二楽章

クララ「そして、あの曲が披露されるのね」

○ カーネギーホール 1893年12月16日 ドボルザーク52歳

サーバー夫妻の出迎えに答えるアントニンとアンナ。

ジャネット「マエストロ、おかげさまで、ついにこの日を迎えることができました」

アントニン「ご満足いただけるか、正直心配ですが」

ジャネット「そんな心配はご無用ですわ。客席を埋め尽くした観客をうらぎることなんか決してありません」

♪ 交響曲第9番 新世界 作品95 第二楽章

盛大な拍手に答えるアントニン。

ブラームス「アントニンの交響曲はこの新世界が最後になる」

クララ「翌年の五月、二年の契約を終えて一家はヴィソカーに戻ったのよね」

ブラームス「サーバー夫人とは帰国間際に一年の延長契約を結んでた」

○ ヴィソカー 1894年 8月

ベンチに座り鳩に餌をやるアントニン 下手からアンナ登場。

アンナ「幸せそうですね」

アントニン「わかるかい？」

アンナ「不思議ね。カーネギーホールで万雷の拍手を受けていた時よりも、ずっと幸せそうに見える」

アントニン「そうだろうな。あの興奮を忘れたわけじゃないんだが…」

アンナ「夢のような出来事だったわ」

アントニン「そうだ。あれはきっと夢だったんだ」

アンナ「まだ、なにかやり残したことがあるのね」

アントニン「君に隠し事はできないな」

アンナ「オペラね」

アントニン「わかるんだね」

アンナ「まだ時間はあるわ。あなたなら大丈夫」

○ 1901年3月31日 プラハ国民劇場 ドヴォルザーク 59歳

♪ オペラ「ルサルカ」より 月に寄せる歌

空の深みのお月様 あなたははるか遠くから 明るい光を送り出し

広い世界を移ろいながら 人の住処を見つめてる 広い世界を移ろいながら 人の住処を見つめてる

月よ しばらくそこにいて 教えて 愛しい人はどこ 月夜 しばらくそこにいて

教えて 愛しい人はどこ 伝えて 銀のお月様

伝えて あたしはあの人を いつもこの手に抱きしまてるわ たとえ 束の間だとしても

あたしの梅を見るように 照らして 彼方のあの人に 伝えて ここで待ってると

照らして 彼方のあの人に 伝えて ここで待ってると

ああ 人の魂が あたしの姿を夢に見れば きっと目を覚ましてくれるでしょうに

ああ 消えないで お月様 消えないで

T「ルサルカは大成功を収め、アントニン・ドヴォルザークはこの年、貴族院議員に選出され、プラハ音学院長にも就任した。しかし、1904年に初演された最後のオペラ「アルミダ」は、失敗に終わり、5月1日、チェコの誇るマエストロは脳卒中で62歳の生涯を終えた」

♪ レクイエム変ロ長調 作品89

T「5月5日 遺骸は長い葬列に見送られ、ビシェフラッドの墓地に埋葬された」

参考文献

黒沼ユリ子著 「ドヴォルジャーク ―その人と音楽・祖国―」 富山房インターナショナル 2018年

内藤久子著 「ドヴォルジャーク」 音楽之友社 2016年

ロデリック・ダネット著 橘高弓枝訳 「チェコが生んだ偉大な作曲家 ドボルザーク」 偕成社 2015年

属啓成著 「ドヴォルザーク 音楽写真文庫VIII」 音楽之友社 1963年